

ウクライナ侵攻作戦が長期化した原因 ーロシア陸軍の『大隊戦術群』に関する考察ー

はじめに

ウクライナ侵攻当初のロシア当局者は、自国産のエネルギー資源に強く依存する欧州各国との緊密な経済関係、親ロシア派を保護するために軍事力を行使するという口実の正当性を高めるための情報操作による国内外の世論形成、近代的な通常戦力と人類を破滅させ得る核戦力から成る軍事力といった、外交、情報、軍事、経済（DIME）上の有利な条件を理由に侵攻作戦の早期成功を確信していたのではないだろうか。それは国際社会も同様であり、例えば米国当局者も首都キエフの陥落は開戦後数日内と見ていたといわれる¹。

しかし、開戦後ひと月以上経過した今も未だ侵攻作戦は終結していない。一方で国際社会は、まるで幾つものサーキット・ブレーカーを作動させたかのようにロシアへの制裁を強めている。例えば、欧州連合（EU）は「国際銀行間通信協会（SWIFT）」からロシアの銀行7行を排除する措置の発動に合意した²。また、G7 首脳は国際社会からロシアを孤立させるとの声明を出した³。この動きは、時間の経過とともに厳しくなる公算が高いと推察される。

厳しい立場を自ら招いたロシアであるが、「戦争のルール」が変化することを予見しなかったわけではない。むしろ 2013 年には DIME における非軍事的手段の役割が増大し、場合によってはその有効性が兵器の威力を凌駕する時代が来るという極めて先見的なビジョンを持っていた。「ゲラシモフ・ドクトリン」と呼ばれる、有名な概念を提唱したのは他でもない、現ロシア軍参謀総長のワレリー・ゲラシモフ（Valery Gerasimov）上級大将である⁴。

しかし、そのような指導者が率いていると思えない程にロシアは外交、情報、経済上の思惑がうまくいかず、欧米の非軍事的な制裁によって苦しめられている⁵。その一因は、数日で終結すると誰もが見ていた侵攻作戦の長期化であろう。時間が経つほど苦しくなるのに軍事的状況が改善しない、その理由は、ロシアの陸軍と空軍、それを束ねるリーダーシップにあるという見方が強い。元米陸軍情報分析官のウィリアム・アーキン（William M. Arkin）は、ロシア陸軍が開戦後わずか1日で当初の勢いを失った理由を、直接的には燃料、弾薬、食料、訓練指導の不足、深層的には徴兵制の軍隊、軍備、楽観的すぎる戦略にあると見る⁶。その結果、開戦後の累積損耗は、3月27日時点で戦車300両を含む車両1,024輦、航空機67機に上り、今も増加傾向にある⁷。メディアの関心は、その責を問われるかもしれないセルゲイ・ショイグ（Sergei Shoigu）国防相の動静が2週間近く絶えたこと⁸、20人投入されたロシア軍将官のうち3月25日時点で7人が戦死し、1人が軍事作戦の責を問われ解任されたという観測に寄せられている⁹。こう見ると、本侵攻作戦が長期化した原因は、一般的に言われるとおり、陸空軍の能力とリーダーシップにあるという見方が有力であろう。

しかし、その深層にある原因は何であろうか。謎を解く鍵は、本侵攻作戦に大量投入された大隊戦術群（battalion tactical group: BTG）にあると考える。ショイグ国防相は2021年

3月時点でBTGを168個整備したと述べており¹⁰、本侵攻作戦に約7割に当たる120個が投入された¹¹。その19%のBTGが3月10日時点で戦闘不能状態にあると見られている¹²。その数字から、本侵攻作戦が長期化した一因には、BTGの何らかの問題が関係すると見ることはできるのではないか。しかし、BTGに視点を置いた侵攻作戦の長期化に関する考察は少ない。そこで本稿は、上記に係る考察を行い、以後の議論に貢献することを目的とする。

1 軍指導者の軍改革とBTG

BTGは、紛争地域に戦力を素早く展開する目的で作られた即応戦術集団である。その狙いは、冷戦期のソ連軍のように大規模かつ即応性の低い基幹部隊を中心とする動員型の部隊から、常備型で小規模で柔軟性のある部隊に転換することにあった¹³。小泉悠が「ソ連崩壊後に行われた軍改革としては最も大規模で抜本的なものであったことだけは間違いないだろう」と評する、この2008年を起点とした大規模な軍改革の主導者は、当時の国防相であるアナトーリー・セルジューコフ（Anatolii Serdyukov）であった。セルジューコフは、従来の師団を解体し、常備化した旅団の編成を目指した¹⁴。しかし、即応性を高めるニーズは認めるものの、その前提として契約兵（kontraktniki、いわゆる志願兵）の不足や12カ月周期で交代する徴集兵などの人的資源に係る問題を解消する必要があり、実現が疑問視された。その中でBTGは、第二次チェチェン紛争時に対反乱作戦の基盤として導入された¹⁵。

2012年11月、セルジューコフが横領容疑で解任され、ショイグが後任に就くと、旅団内にBTGを導入する方向で動きが本格化した¹⁶。その中で旅団の中に最大2つのBTGが編成された。BTGは、一般的に700から800人、強化型は900人の兵員とBMP-3等歩兵戦闘車、T-90等戦車、自走榴弾砲、多連装ロケットランチャー等で構成された¹⁷。

BTGが一躍脚光を浴びたのは、2014年のウクライナ東部ドンバス地方における戦闘である。ロシアは、ウクライナ軍に排除されかけた親ロシア派勢力を保護するため、BTGを投入した。BTGは、戦術的・作戦的な奇襲によってウクライナ軍の大部分を壊滅させた¹⁸。

その「成功体験」の後押しもあり、ショイグ国防相、そして彼から参謀総長に任命されたグラシモフは、BTGを強力に推進した。例えば2016年9月にグラシモフは2016年時点で66個のBTGを同年末に96個、2017年に115個、2018年に125個まで増強すると発言した¹⁹。また2021年8月にショイグは168個のBTGが1時間以内に展開可能な常時警戒態勢を構築したことを強調した²⁰。つまり、BTGは軍指導者の功績を強調できる「肝いり政策」の側面も有していたのである。

2 BTGの問題－米陸軍の研究

しかし、BTGには問題があった。例えば、米陸軍のニコラス・フィオーレ（Nicolas J. Fiore）は、2017年に米陸軍旅団戦闘チーム（brigade combat team: BCT）が将来的にBTGと交戦

することを想定して、BTG を戦術的に撃破するための論考を発表した。フィオーレは、2014 年の BTG とウクライナ軍の戦闘を分析すると、BTG が火力、電子戦、防空砲において圧倒的な優勢を有しているにもかかわらず、ウクライナ軍に戦術的な敗北を喫するケースが何度かあることに気が付いた。そこから彼は、BTG が有する 4 点の脆弱性を導き出した。

1 点目は、人的資源の問題である。BTG は、三分の一を質の高い契約兵が占め、残りは質の低い徴集兵から成る。BTG は数を拡大したが、契約兵は不足した。その理由は、チェチェンやジョージアでの大きな犠牲者が志願者を減少させたからである。また、徴集兵は簡単な仕事でも継続的に監督する必要があるため、戦闘よりも支援に使われる。つまり、徴集兵を近接戦闘に使用するために 12 カ月の従軍期間の中で最大限の能力を引き出す訓練が必要となり、一方で高価値の契約兵は不要なリスクを冒せないというジレンマが生じやすい²¹。

2 点目は、歩兵を中心とする即応機動部隊の不足が BTG の機動力を大きく制限することである。BTG は、攻撃作戦と側面・後方の安全確保を同時に行うことができない弱点を有し、複数の同軸攻撃が行われると砲兵を集中させるのに苦勞する可能性がある²²。

3 点目は、指揮統制（C2）上の制約である。BTG 指揮官は、情報収集を行いながらミッション・コマンド（Mission Command）²³で行動し、射撃や電子戦を行う。その中で情報収集部隊は、攻撃部隊の中から選抜される。そのため、BTG が受け持つ戦域全体で積極的に分散と交代を繰り返す必要があり、能力的に過負荷となる可能性がある²⁴。

4 点目は、BTG が近隣の戦域や駐留地に所在する他のユニットから補充することができないため、損耗が生じた場合、戦闘力を迅速に回復させることができないことである。BTG 内の兵員、特に高価値の契約兵や指揮官が死傷すると戦闘力が劣化するため、補充されない限り、戦闘効果を急速に喪失する。そのため、BTG 指揮官は信頼性が高い脅威情報に直面すると、リスク回避のために撤退を選択し、戦力を温存する傾向が強くなる可能性がある²⁵。

上記 4 点を踏まえれば、フィオーレは、自軍に BTG が火力を集中する機会を回避し、ハイテンポな分散機動と多方向攻撃を行うことで BTG の能力を奪えると考えたのである。

3 本侵攻作戦が長期化した要因の考察

ここでは、BTG の問題が本侵攻作戦の長期化につながったと仮定し、フィオーレが導出した BTG の 4 点の脆弱性を視座として、本侵攻作戦が長期化した要因を考察する。

1 点目の人的資源については、米国の戦争研究所（Institute for the Study of War）のロシア研究者であるメイソン・クラーク（Mason Clark）によれば、ロシア軍は 2021 年 3 月末から停戦合意に反してウクライナ陣地への攻撃をエスカレートさせ、駐留中の 28 個 BTG に 25 個を追加配備して演習を開始した²⁶。その後もロシアはウクライナ国境付近に軍の増強を継続し、ベラルーシと演習を行いながら 2022 年 1 月末には約 10 万人に達した²⁷。防衛研究所の山添博史は、この動きをウクライナ、更には米国に対する強要戦術であると見ていた²⁸。一方、ロシア兵の中には戦闘に投入されることも知らされず、士気の低さ故に部隊

ごとと降伏する徴集兵に関する報道を考慮すれば²⁹、ロシアは当初からウクライナ侵攻を前提にして徴集兵を1年余りの長期に渡り訓練した可能性がある³⁰。他方、現時点で高価値の契約兵を温存した事実は見当たらない。むしろ、ロシアはウクライナに最新鋭の通常戦力を投入せずに温存し、核などの大量破壊兵器を使用する可能性が高いと見る報道が散見される³¹。

2点目の機動力については、ロシア空軍が航空優勢を確立できない条件下において、トルコ製バイラクトル(Bayraktar)TB2や米国製対戦車ミサイルのFMG-148 ジャベリン(Javelin)などによる同時多方向攻撃が道路上に縦列展開するBTGを撃破している事例を見れば、BTGが最も苦手とする攻撃を受けた可能性がある³²。これは、12機から36機程度の保有が見積もられ、BTGの動静を正確に把握して攻撃を行う「戦場の目と爪」として注目されたバイラクトルTB2の存在が大きいのではないだろうか³³。更に注目すべきは、ウクライナ軍の偵察活動に協力する一般市民の市販品ドローンである。これらのドローンは、4K以上の高解像度カメラや獣害対策にも使用される赤外線カメラを搭載し、100km/h 近くの高速度で海拔5,000m程度の高高度でも飛行可能であり、3次元プログラム飛行や目標の自動追尾、障害物回避などの機能も有し、電波状況が良好であれば8km程度の範囲を30分以上飛行可能なリチウム電池機もある。これらは軍用のTB2と比べて偵察、攻撃、対電磁妨害などの能力が脆弱であり、ロシア軍のBTGと空軍機が十分な防空能力、電磁妨害能力、制空能力を発揮していれば、その活躍は困難であったかもしれない。しかし実際には、1機数億円のTB2と安価な市販品ドローンの「ハイロー・ミックス」は、ウクライナ軍の戦闘を有利にしたように見える。他方、前述のアーキンは、ロシア軍間の連携攻撃や射撃精度（命中率7%程度）が低質だと評価している³⁴。これらから、ドローンによる偵察や携帯兵器を組合わせた多方向攻撃と火力上の欠陥は、BTGに負の相乗効果をもたらした可能性がある。

3点目のC2については、将官が前線に出て戦闘指導を行い、不安全な一般通信を使用したところで狙撃兵に射殺される事例を見れば、最も分かり易いBTGの弱点のように見える。他方、ロシア軍は2014年以降C2の改善に取り組んできたものの、今回のように一般通信を使用する事情を作ったのはハリコフの電波塔を破壊して新世代暗号通信を使用できなくしたロシア軍自身だと伝える報道もある³⁵。結果、本侵攻作戦においてBTGは、結果としてC2が脆弱であった2014年と同じ状況に陥った可能性がある。

4点目の損耗と回復については、現地でBTGの損耗分を再補充できないことが、カムチャツカに展開する部隊をウラジオ経由、シベリア鉄道でウクライナに輸送しなければならない事態を生み出している可能性がある³⁶。

これらの考察から、フィオーレが考察したBTGの4つの脆弱性は、更なる情報収集によって分析の精度を上げる余地が多々残されているものの、本侵攻作戦が長期化した要因を推定し理解を深める視座として、相応の説明力、有用性を有しているのではないだろうか。

おわりに

BTG の導入によるロシア陸軍の近代化は、2014 年のドンバスにおける「成功体験」が後押しする形となり、現指導者であるショイグ国防相とゲラシモフ参謀総長の指導で強力に推進された。それ故、BTG は今回の侵攻作戦に絶対の自信を持って投入された可能性がある。しかし、BTG は人的資源、機動力、C2、損耗と回復に関する 4 つの脆弱性を有することから、これを視座に分析してみれば、ウクライナ軍の善戦もあり想定外の苦戦を強いられ、侵攻作戦が長期化したという見方ができるのではないだろうか。なお、今回は陸軍とリーダーシップに焦点を絞ったが、海軍、空軍も含めた今後のすう勢とその背景にも注目したい。

(戦略研究室 2 等海佐 高橋 秀行)

(本コラムに示された見解は、海上自衛隊幹部学校における研究の一環として発表する執筆者個人のものであり、防衛省、海上自衛隊の見解を表すものではありません。)

¹ ナビード・ジャマリ、デービッド・ブレナン、トム・オコナー「キエフ陥落は数日以内 (米当局者)」Newsweek、2022 年 2 月 25 日、

https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2022/02/post-98156_3.php。

² 「EU 理事会、一部ロシア銀行の SWIFT 排除で合意」ロイター、2022 年 3 月 2 日、
<https://jp.reuters.com/article/idJPKBN2KY5R3>。

³ 「G7 首脳会議：ロシアに生物・化学兵器や核兵器使わないよう警告」NHK、2022 年 3 月 25 日、<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220325/k10013550671000.html>。

⁴ Valery Gerasimov, "The Value of Science in Anticipation," *Military-Industrial Courier*, February 6, 2013, <https://vpk-news.ru/articles/14632>。

⁵ 軍事的合理性に関する論考は、次を参照。高橋秀行「ロシアのウクライナ侵攻と軍事的合理性：軍事ドクトリンとプーチン」『FPC NEWS』vol. 18、2022 年 3 月 8 日、
http://www.foreign-policy-center.tokyo/_src/5050/FPC%20newsletter%20volume18.pdf。

⁶ ウィリアム・アーキン「ロシア軍『衝撃の弱さ』と核使用の恐怖——戦略の練り直しを迫られるアメリカ」Newsweek、2022 年 3 月 3 日、
https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2022/03/post-98211_7.php。

⁷ Stijn Mitzer, Joost Oliemans, Kemal, Dan, Jakub Janovsky, "Attack On Europe: Documenting Equipment Losses During The 2022 Russian Invasion Of Ukraine," ORYX, February 24, 2022, updated March 27, 2022, <https://www.oryxspioenkop.com/2022/02/attack-on-europe-documenting-equipment.html>。

⁸ 「ロシア政権内部に異変…要人辞任・動静途絶、『クーデター辞さず』観測も」読売新聞オンライン、2022 年 3 月 26 日、<https://www.yomiuri.co.jp/world/20220326-OYT1T50080/?ref=webpush>。

⁹ 「ロシア軍将官 7 人死亡、1 人解任 西側当局」AFPBB、2022 年 3 月 26 日、

https://www.afpbb.com/articles/-/3397062?cx_part=theme-latest.

¹⁰ “Russian Army operates around 170 battalion tactical groups — defense chief,” TASS, August 10, 2021,

https://tass.com/defense/1324461?utm_source=ja.wikipedia.org&utm_medium=referral&utm_campaign=ja.wikipedia.org&utm_referrer=ja.wikipedia.org.

¹¹ 「通常戦力の 75%集結か：ロシア軍、ウクライナ周辺に一米報道」時事通信、2022 年 2 月 21 日、<https://www.jiji.com/jc/article?k=2022022100126&g=int>。

¹² 米内修「BTG を約 19%も喪失していた！戦力を失いつつあるロシアが『思うように攻撃できない』驚きのワケ」ロイター、2022 年 3 月 18 日、https://jp.mobile.reuters.com/article/amp/idJP00093300_20220318_00720220318。

¹³ Roger McDermott, “Moscow Resurrects Battalion Tactical Groups,” *Eurasia Daily Monitor*, Volume: 9, Issue 203, November 6, 2012, <https://jamestown.org/program/moscow-resurrects-battalion-tactical-groups/>.

¹⁴ 小泉悠『現代ロシアの軍事戦略』筑摩書房、2021 年、195 頁。

¹⁵ McDermott, “Moscow Resurrects Battalion Tactical Groups.”

¹⁶ Ibid.

¹⁷ “Contractees in BTGs,” *Russian Defense Policy*, September 17, 2016, <https://russiandefpolicy.com/2016/09/17/contractees-in-btgs/>; Kyle Mizokami, “How Russia’s Battalion Tactical Groups Will Tackle War With Ukraine,” *Popular Mechanics*, February 24, 2022, <https://www.popularmechanics.com/military/weapons/a39193732/russian-battalion-tactical-groups-explained/>.

¹⁸ Nicolas J. Fiore, “Defeating the Russian Battalion Tactical Group,” *ARMOR*, Spring 2017, pp. 9-10, <https://www.benning.army.mil/Armor/eARMOR/content/issues/2017/Spring/ARMOR%20Spring%202017%20edition.pdf>.

¹⁹ “Contractees in BTGs.”

²⁰ “Russian Army operates around 170 battalion tactical groups — defense chief.”

²¹ Fiore, “Defeating the Russian Battalion Tactical Group,” p. 9.

²² Ibid.

²³ ミッション・コマンドとは、作戦計画の立案や中央集権的な指揮統制の権限を下位指揮官に委ねる意思決定法。訓令戦術（Auftragstaktik）とも呼ばれる。詳しくは、次を参照。高橋秀行「軍事的意思決定概念の新旧比較分析—米国の『モザイク戦』概念の視点から—」『海軍校戦略研究』第 10 巻第 2 号、2020 年 12 月、65-66 頁。

²⁴ Fiore, “Defeating the Russian Battalion Tactical Group,” p. 9.

²⁵ Ibid.

²⁶ Mason Clark, “Russia In Review: Russian Deployments Near Ukraine Likely Intended To Pressure Zelensky, Not Biden,” Institute for the Study of War (ISW), April 1, 2021, <https://www.understandingwar.org/backgrounder/russia-review-russian-deployments-near-ukraine-likely-intended-pressure-zelensky-not>.

²⁷ 「アングル：緊迫するロシアとウクライナ、グラフィックで見る現状と経緯」ロイター、2022年1月31日、<https://jp.reuters.com/article/russia-ukraine-graphics-idJPKBN2K2064>。

²⁸ 山添博史「ウクライナをめぐるロシアの強要戦術」NIDS コメンタリー、第204号、防衛研究所、2022年2月8日、<http://www.nids.mod.go.jp/publication/commentary/pdf/commentary204.pdf>。

²⁹ 「ロシア軍は『食料不足に士気低下』、戦闘前に部隊ごと降伏する例も…米高官指摘」読売新聞オンライン、2022年3月2日、<https://www.yomiuri.co.jp/world/20220302-OYT1T50100/>。

³⁰ なお、岡部直によれば、徴集兵は入隊後約4か月しか訓練を受けないという。岡野直「ウクライナ侵攻のロシア軍に未熟な徴兵者、母親ら批判：プーチン政権、火消しに躍起」The Asahi Shinbun Globe+、2022年3月15日、<https://globe.asahi.com/article/14571376>。

³¹ 「現地は今ーキエフの1か月、ロシア軍『苦戦』の理由は」NHK、2022年3月26日、<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220326/k10013552511000.html>。

³² Davis Winkie, “Ukraine’s drone strikes reveal Russian planning failures, expert says,” Military Times, March 2, 2022, <https://www.militarytimes.com/flashpoints/ukraine/2022/03/01/ukraines-drone-strikes-reveal-russian-planning-failures-expert-says/>; マーク・チャンピオン「ウクライナが得た大量の対戦車ミサイル、ロシアに戦術変更迫る可能性」Bloomberg、2022年3月16日、<https://www.bloomberg.co.jp/news/articles/2022-03-15/R8SGLUT0G1L101>。

³³ Lauren Kahn, “How Ukraine Is Using Drones Against Russia,” Council on Foreign Relations, March 2, 2022, <https://www.cfr.org/in-brief/how-ukraine-using-drones-against-russia>.

³⁴ アーキン「ロシア軍『衝撃の弱さ』と核使用の恐怖」。

³⁵ 武隈喜一「苦戦するロシア軍：ある司令官の死で露呈した通信システムの脆弱さ」テ레朝 news、2022年3月17日、https://news.tv-asahi.co.jp/news_international/articles/000248345.html。

³⁶ 「ロシアの揚陸艦4隻、津軽海峡を通過…極東部隊をウクライナに輸送か」読売新聞オンライン、2022年3月16日、<https://www.yomiuri.co.jp/politics/20220316-OYT1T50247/>。